

## 「マルセル・デュシャンと日本美術」展における 日本美術の過去に例のないプレゼンテーション

松嶋雅人

文化財活用センター企画担当課長・東京国立博物館



### 略歴

東京国立博物館において、日本絵画史の調査研究をふまえた常設展示ならびに特別展事業にたずさわる。『没後 400 年 長谷川等伯』（東京国立博物館・京都国立博物館 2010）、*Remaking Tradition: Modern Art of Japan from the Tokyo National Museum* (Cleveland Museum of Art, U.S.A. 2014) や『俺たちの国芳 わたしの国貞』（Bunkamura ザ・ミュージアム、神戸市立博物館、名古屋ボストン美術館 2016）などの特別展を企画。

文化財活用センターでは、「びょうぶとあそぶ 高精細複製によるあたらしい日本美術体験」（2017）、「トーハク×びじゅチューン！ なりきり日本美術館」（2018）といった体験型展示や文化財の複製制作、高精細映像事業にかかわる。

東京国立博物館（以下、東博）はフィラデルフィア美術館と、2018年10月2日から12月9日まで「マルセル・デュシャンと日本美術」展（図1・2）を共同開催した。本展は2部構成で第1部の「デュシャン 人と作品」（原題“The Essential Duchamp”）は、フィラデルフィア美術館が企画・監修した国際巡回展で、同館所蔵のデュシャン・コレクションの油彩画やレディメイドなどの150余点によって、彼の創作活動の足跡を明らかにしたものである。そして第2部「デュシャンの向こうに日本がみえる。」は、東博の日本美術コレクションで構成し、もともと西洋とは異なった社会環境のなかで作られた日本の美術の意味や、価値観を浮かび上がらせて、日本の美の楽しみ方を新たに提案しようとするものであった。

東博と同館の関係はフィラデルフィア万国博覧会（1876年）以来のものであるが、近年は同館が開催した日本美術の展覧会で、東博は日本国内の文化財に関わる業務全般に協力してきた。そのような事業交流を続けるなかで、デュシャン没後50年にあたる2018年にアジア各地でのデュシャン展開催をフィラ



図1 特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」ポスター



図2 特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」チラシ

デルフィア美術館が立案し、東博に本展開催を正式に打診された。東博はいわゆる「現代美術」を展示することは一般的でない。そのため日本美術を組み合わせ併催することを条件として開催の合意を得た。もとよりデュシャンの芸術的足跡を御覧いただくことで、明治以来の日本美術の鑑賞方法—西洋美術の価値観に基づく—ではない、新しい日本美術の鑑賞体験となる機会となると考えていた。ありていにいえばデュシャンの鑑賞体験によって、現在の一般的な日本美術の見方も相対化できると想定していたのである。したがって第2部のタイトルも「デュシャンの向こうに日本がみえる。」という文字通りの意味を持っており、同館側も日本美術展を併催することの意図をご理解下さり、東京会場だけが2部形式の展覧会となった。



図3 第1部「デュシャン 人と作品」展示風景

第1部(図3)は同館キュレーター、マシュー・アフロン氏により企画監修され、東博スタッフによる展示作品、展示デザイン、グラフィックデザインなどの提案が各所に反映され、両館の学芸的意図が融合した展示会場として完成した。アフロン氏の懇切丁寧な解説もふんだんに掲示し、デュシャン芸術の理解に供することができた。会場では日英中韓の章解説、作品解説も用意され、また会場の環境保存的観点から両館の専門家の検討、討議も深く行われた。そして、第2部の日本美術展示(図4)では西洋とは異なった社会的価値観のもとに生まれた造形物を、視覚的效果やリアリズム、時間といったテーマをとりあげながら、新しい日本美術の見方を考えていただくことを目的として構成された。



図4 第2部「デュシャンの向こうに日本がみえる。」展示風景

近年の東博の「特別展」は、メディア各社と共同開催するものが多いが、本展は独自の財源を組み上げ、入場料金などを主な財源として自主開催された。そこでは TERRA FOUNDATION FOR AMERICAN ART の助成を得て、講演会などの普及活動が実施されたほか、各種企業からは展示に関わるさまざまな機材提供を受けることができた。また文化庁による美術品の補償制度によって保険料の大幅な軽減も可能となった。

可能となった。

そして自主独立展として、通常できない事業を各種展開することができた。例えば1部、2部ともに自館コレクションのため、会場全般で来館者自身の作品撮影が許可され、SNS 利用によって本展が紹介されることが多々見られた。また展覧会独自の Web サイトやツイッターアカウントの開設、展覧会マスコット、グッズの作製などとともに、現在各方面で活躍する美術家やクリエイターの方々に出演いただく動画の配信を行った。さらには通例の音声ガイドではなく、「デュシャン大喜利」なる展示作品を楽しむための実験的方法も試みた。これらの成果として本展にはデュシャンを特段、知らない20~30歳代の年齢層の来館者を多く集め、日本において今後のデュシャンの芸術理解に大きな意味を持つ結果を得たといえるだろう。さらに特筆すべき事項として、デュシャンに深く影響を受けた美術家の方々に、極めて高い評価を受けることもできた。

本展は8万人を超える入場者を迎え、フィラデルフィア美術館のデュシャン・コレクションが自

館以外で、彼の作品がまとまって公開される稀有な機会となった。さらには、それらを日本美術品と比べて見ることで、芸術を「みる」のではなく「考える」ことを促し、多くの方々にさまざまな知的興奮を呼び起こした貴重な展覧会になったと考えている。